新・農業経営者ルポ／第65回

「地域に元気、社員に笑顔、社会に緑の風を……」

父親から引き継いだ養豚事業を縮小し、新時代の農業経営を目指すために7年前に設立された有限会社親和。設立から4年後、特定農業法人の認定を受けた。現在、農用地の引き受け先は120人。地域の農村で高齢化が進む中、集落営農の担い手として活躍する北村進一は、アルバイトにやってくる地元の中学・高校生からも頼りにされ、人手不足とも無縁な農業経営を展開している。

取材・文／昆吉則・芹沢比呂也　撮影／編集部



「地域に元気、社員に笑顔、社会に緑の風を……」

敬老の日を中心に5連休となった9月のシルバーウィークを目前に控えた小雨の午後。琵琶湖の湖畔に広がる水田地帯を訪れた。滋賀県の北東部に位置する米原市・世継（よつぎ）集落。ここは、豊臣秀吉ゆかりの地で有名な長浜の食料供給地としてその役割を担ってきた地域である。

滋賀県の集落営農数は825を数え、全国第1位で全国平均の約3倍に当たる（集落営農実態調査2009年2月1日）。これは、急速に進む高齢社会の中で、農村の担い手不足に悩みながら、常に前進してきた農業経営者の歴史を物語っているとも言える。かつて本誌では集落営農の矛盾点を指摘して批判してきた。しかし本稿では、農村の現場で翻弄されながらも、新たな挑戦を始めた農業経営者を紹介したい。

若者を引き寄せる農業経営者

集落営農の担い手として活躍している北村進一（57歳）が経営する㈲親和には、現在10名の社員がいる。同社の事務所で、まず筆者を出迎えてくれたのは20代の若い社員たちだった。創刊したばかりの「Agrizm」を手渡すと、食い入るように読み始めた土川恭太（28歳）は入社2年目。話を聞くと、彼は高校生時代にアルバイトをして以来、北村とは10年間の付き合いだという。大学進学後もアルバイトを続け、卒業後2年間一般企業の会社員を経験した後、古巣に戻るように同社に入社した。

「高校生当時、僕は野球部に在籍していて、夏の大会後に初めてアルバイトを体験しました。まるでクラブ活動の延長線のようでした。ぼけーと突っ立っていると厳しく叱られましたが、仕事で失敗してもおっちゃんはけっして怒りませんでした」

アルバイトの高校生たちは、北村のことを親しみを込めて〝おっちゃん〟と呼ぶ。おっちゃんが怒るときの口癖は今でも変わらない。

「働くという字の意味を考えろ。人が動くと書くんや」

彼らはお金をもらって仕事をすることの意味を知り、農業を楽しむことを学び、やがて自主的に仕事のロールテーションを作るようになった。仕事が終わった後も、恋愛相談や人生相談が夜遅くまで続き、冬にはスキー旅行にも連れ出されたという。

北村に引き寄せられる若者は、今も後を絶たない。今年の夏に新たに入社した西川真司（28歳）は、異業種からの転職組み。出身地も遠く離れた千葉県だ。彼は会社説明会の会場で北村の話を聞いて、入社を即決した。会場で感動のあまり拍手してしまったというから驚きだ。この若者の心を捉えたのは「ありがとうの反対語は何だ？」という問いかけだった。ぽかんと口を開けた西川にたたみかけるように説いて聞かせた言葉は、まるで禅問答のような内容だった。

「ありがとうの反対語は〝あたりまえ〟や。多くの人は心臓が動いとることをあたりまえだと思っとるけど、生きていることの感謝を忘れたらあかん。人は何かに活かされとる。とくに自然相手の農業は、あたりまえのことに感謝する気持ちが大切なんや」

トレードマークの深くかぶったキャップの影からは、優しい目がのぞく。北村は、人に喜んでもらうことが生きる力になり、それが仕事の本質だという。自己実現のためには「他者実現」が必要で、人に頼まれたことをただ無心に繰り返すことで、他者実現と自己実現が表裏一体の関係にあることを農業経営を通して学んできた。これを若い人に伝え、農業の可能性を一緒になって広げていきたいと願っているのだ。

北村と西川の一対一の面接は3時間に及んだ。若者が受け取った名刺には企業理念が書かれていた。北村を訪ねてくる青年たちとの面接が半



農業生産法人　有限会社親和
代表取締役社長
北村進一

滋賀県米原市

きたむら・しんいち●1952年、滋賀県米原市生まれ。高校卒業後、通称“サイボク”と呼ばれている埼玉種畜牧場で本誌でもお馴染みの農業経営者・田中正保と出会い夢を語り合う。21歳で社団法人農業研修生派米協会（現社団法人国際農業者交流協会）の第8回研修生として養豚を学ぶために渡米。現在、養豚事業からは撤退し、水稲47ha、麦28ha、大豆20haの他に野菜などを生産。３年前に居宅介護支援事業所ルピナスを開設し、全国でも珍しい農業と介護のコラボレーション事業の可能性を模索中。

日に及ぶことも珍しくはない。きっと北村は、人を雇うという実利だけでなく、その出会いそのものに意味を感じているのではないだろうか。そのこと自体が、北村の人生の目的であるとともに㈲親和の理念にも繋がることだからだ。北村が考えた親和の企業理念にはこう語られている。

「地域に元気　社員に笑顔　社会に緑の風を」

青春時代の出会いが育んだ人間力

北村は、時に厳しく、時にやさしく、若者たちを指導し見守ってきた。中には実家の田畑の作業さえ手伝ったことがないのに、この農場で友達を誘ってアルバイトをしにくる若者もいる。彼女ができると農場に連れてきて、アルバイト仲間に加わることもあった。人を呼び寄せ居つかせてしまうこの人間力の源は、いったいどこからくるのだろうか。北村は自分の原点は高校生時代に遡るという。

「高校生の時、ブラジルやアメリカに移民として入植して畜産をしたいと、よく友人と夢を話しとったんやけど、卒業後、すぐにサイボクで1年間研修することになりましたんや」

サイボクとは、埼玉種畜牧場のことだ。養豚のバイブルと言われている全18巻の『養豚大成』の著者でもある笹崎龍雄（96歳）が創業した畜産ビジネスの聖地で、年間380万人の来場者を誇る「農と食と健康のテーマパーク」である。北村は当時を振り返りこう語る。

「休みの日には近くの沼で素っ裸で泳いで、夜遅くまで、生きることってなんなのか、将来の夢をどうやって実現するのか、いつも議論しとりました。特に田中さんと過ごした時間は、今でも宝物やなあ」

田中とは本誌でもお馴染みの田中正保である。現在、鳥取で土づくりにこだわった水田稲作を大規模に実践している。多感な青春時代の人との出会いが、夢を持ち、哲学し、それを実践する強さを育み、人を呼び寄せる人間力につながっていたのである。

その後、北村は家業の養豚経営を手伝いながら経験を重ね、21歳の時に、とうとう日本を飛び出すことになる。農業研修生派米協会（現社団法人国際農業者交流協会）の8期生としてネブラスカ州の養豚場で2年間の研修生活を経験した。日本はオイルショックの真っ只中で、トイレットペーパーの買い占め騒動が巻き起こり、米国ではウォーターゲート事件のニュース一色に染まったころだ。移ろいゆく世間の雑音に惑わされず、海外農場の規模の大きさと経


5


2


1


6


3


7



4

1「居宅介護支援事業所ルピナス」の文字が見える北村の事務所の前で、筆者らは本当にここで間違いはないのかと悩んだ。2北村を取材に来た我われを若者たちが取り囲み、真剣な眼差しで北村と筆者らの言葉に耳を傾ける。この事務所は彼らの働き場所であると同時に、職業人として、そして人としての修業の場所のようだった。4社員たちのロッカーのひとつに「I♥社長」と落書きされていた。北村と中学生時代から彼を慕う社員たちの関係が見えた。5乾燥調製システム。農家の要望に応じて張り込み量の小さな乾燥機も用意されている。7圃場をバックに駐車している居宅介護支援事業所ルピナスの車。ルピナスの事務所は、ケアマネージャーの人柄を感じさせる優しい色使いの女性らしい部屋だ。

「地域に元気、社員に笑顔、社会に緑の風を……」

営感覚を肌で感じ、農業の産業としての可能性を確信した2年間だった。

開拓者精神は死なず

北村の人間力を育んだ2つの経験、実は21歳で渡米したときも、18歳で埼玉のサイボクに行ったときも、父親の進（86歳）が後押ししてくれたのだった。特にサイボクで研修生活を送るために付き添ってくれた父親との思い出は、今でも鮮明に思い浮かぶと言う。出発前夜、親子で夜通し語り明かし、別れを惜しんだ。新幹線で新天地に向かい、父と離れて初めて迎える朝礼でのこと。みんなの前でサイボクの笹崎にこういわれた。

「北村君のお父さんはすばらしい方だ。みんなもがんばりましょう」

北村はその言葉がうれしくて涙が出た。父親は、精神的に弱い長男は、若いうちに荒波にもまれることが大事だと考え、母親の反対を押し切って息子をサイボクに送り込んだのだった。厳しくも楽しい研修生活を無事に終えた北村は、埼玉県から自宅の滋賀県まで、自転車旅行をしながら逞しくなって帰ってきた。

北村が慕う大正生まれの父親の青春時代は、ダイナミックなものだった。当時の日本は移民政策を推し進めていた。1938年に尋常高等小学校を卒業後、14歳で満蒙開拓青少年義勇軍として満州へ渡った。満州では今後の日本の産業界の指導者としての使命を背負い、獣医学校で教育を受けることになる。開拓のリーダーとして農業に携わることを夢見るようになった。ところが、18歳の時に学徒出陣で徴兵される。満州から沖縄へ。さらに、その最前線へと向かうべく南大東島に駐屯した。本土決戦に備える最前線で盾となろうと気負いこんでいたが、米軍は大東島に攻撃をしてこなかった。戦乱の中を奇跡的に生き延びたのだ。

終戦後も開拓に出たいという思いが強かったものの、兄が戦死したため米原に戻り養豚を始めることになる。当時、水田しかない地域に養豚とは何事かと、回りからは変わり者扱いされた。しかし、養豚から発生する糞尿で土地を肥やす新しい農業スタイルを説いて回り、養豚と稲作の両方で収益が上がる経営を皆に奨めていったのである。

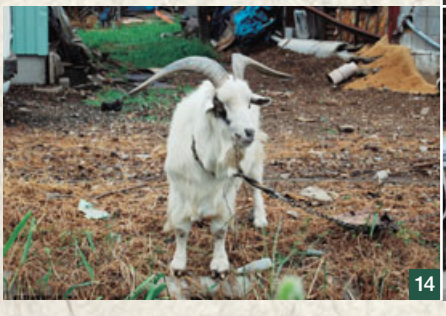
やがて集落のリーダー的存在となり、1961年に親和生産組合を設立。集落の有志たちと酪農、養豚、耕種の各部門を持つ農業生産事業体を立ち上げ、地元の若者たちを巻き込んでいった。畜産と耕種の連携による堆厩肥利用を促進する共同農業のモデルは、全国でも注目を集め、


11


8


12


9


14


13



10

8施設の2階の窓から琵琶湖が見えた。目と鼻の先だ。琵琶湖湖畔の極めて排水が悪い圃場だが、頼まれるとイヤとは言わず引き受けている彼の圃場が湖畔の広範囲に広がる。手前は野菜の生産をしている。11排水を改善するためにスガノの水堀機があった。9 10 12 13すべて超湿田対応の機械ばかり。養豚をしていた頃の豚舎を再利用して、倉庫や機械置き場になっている。14社員たちが可愛がっているペットのやぎ。名前は「草刈正雄くん」。

親和生産組合を紹介する映画も作られた。１９７６年には豚枝肉部門で農林大臣賞を受賞する。

ところが、そんな矢先、牛舎と豚舎が火災に見舞われる。損失額は１億円に上り、大きな借金を背負い込むことになる。当時、まだ中学２年生だった北村は、祖母が夜中に心配してうなされていたことを記憶している。命がけで豚や牛を守り、その後あたりまえのように事業を再興していく父親の姿を見て、いつしか同じ道を歩むこととなった。北村の開拓者精神の源流には父親の存在があったのだ。

集落営農の苦悩を夢と誇りで飲み込む

こうして、北村の歴史をたどると、常に開拓者精神で道を切り開き、自然と人間の調和を大切にすることで、農業の可能性を追求してきた営みが浮き上がってくる。親和生産組合は26年前、父親が還暦を迎えたのを期に発展的に解消した。時代の変化の中で、組合の存在理由が薄れていったからだ。今の会社は、北村が新たに７年前に設立した別会社だ。養豚事業からは撤退し、３年前に特定農業法人の認定を受けて以来、集落営農の担い手としてさらに農地を拡大してきた。



「地域に元気、社員に笑顔、社会に緑の風を……」

集落営農には様々なタイプがあるが、北村は、集落農家の作業を請負う他に、地代を払って農地を借り受けコメの生産販売をしている。それも北村を見込んで品種名を指定して生産依頼してくる業者の注文が少なくない。

北村のところには「集落営農の担い手」だからではなく彼の人柄ゆえに農地が集まり、需要者たちも北村を信じて品種指定の発注をする。そして、若者たちもまたしかりなのである。まさに、必要とされて選ばれているのだ。

北村は集落営農ゆえの矛盾も抱えている。本来、特定農業法人が中心となり集落営農をするケースでは、土地の貸付者である高齢農家や兼業農家が草刈りや水管理を担当することを想定しているが、現実には担い手となった特定農業法人の負担が大きくなってしまうことが多い。たとえば、中山間地域の水田の畦や農道、水路の法面の草刈りなどである。平場とは比較にならないほど手間がかかる。鉄道や高速道路の法面の管理は、分割民営化後の担当各社がすることになっていて責任がはっきりし、そのコストも見込まれている。でも、集落営農の現場では管理責任の主体があいまいになっている。さらに、頼まれた農用地は、どんなに条件が悪くても断ることができない。そのため、行政の表向きの理想論と農村の現場は、なかなか一致せず、全国各地で様々な問題となっているのが現状だ。今後の日本の農業を強くするため、国際競争力のある農業経営を目指そうとしても、コストに見合わない作業を抱え込んで疲弊する担い手たちからは悲鳴が聞こえてくるようだ。減反政策も集落営農の制度も、農業経営者にとってはチャンスではなく、背負わせるものだけが増えているように思えてならない。

ところが、こうした現状をすべて飲み込んで、北村は農業を続けている。夢と誇りをもって大地に身を捧げる開拓者精神だ。頼りにされ、頼まれれば、水が噴出すような水田でも、山沿いの畦の大きな田でも、引き受けて精一杯耕す。取材当日も、農耕地を引き受けてほしいと地主が相談に訪れた。実は、北村の目指す新しい農業の可能性は、一見矛盾するようだが、あらゆる現状をあるがままに受け入れることにあったのだ。

農業と福祉のコラボレーション

北村の目指す農業とは、いったい何なのか。㈲親和の定款に定められた事業目的の項目を見せていただいて目を疑った。8項目のうちなんと半分が介護事業に関わるものだったのだ。居宅等介護事業、通所介護事業、訪問入浴介護事業……。事務所の奥には別室が設けられ、3年前に立ち上げた「居宅介護支援事業所ルピナス」の事務室があった。

「現在は、2人のケアマネージャーで細々とスタートした段階。でも将来は施設の中でのデイサービスではなく、野菜や花を作ったりしながら農業に関われる介護の環境を作り上げたいんや」

北村は、今年の夏にはデンマークに飛び、未知の分野である花きの現場を視察してきたという。農林水産省のホームページには、集落営農の新たな取り組み事例が紹介されている。最新のものでは、他産業との連携による労働力確保のために、地元建設会社と連携したというものがあるが、北村がやろうとしていることは、これとは逆の発想である。他の産業から農業の足りない部分を補ってもらうのではなく、誇りを持って農業の可能性を他の分野に活かそうという発想だ。既に新しくできたばかりのグループホームや、障害者の施設から、業務協力の相談が舞い込んでいる。北村の事業だけでなく、畦の草刈りなどに苦労している中山間地の農地、或いは農村そのものに新しいビジネスチャンスをもたらすものになるかもしれない。

世代を超えて引き継がれる農業経営者の誇り

シルバーウィークの最終日、うれしいニュースが届いた。元高校球児の若手社員、土川に長男が誕生したというのだ。3684gでこの世に生を受けた命は、『陽太』と名付けられた。父となった若者は、今後、おっちゃんや仲間と一緒に農業と介護事業の可能性についても議論していきたいと電話口で語ってくれた。

「うちの会社に大切な土地を貸してくれた地元のじいちゃん、ばあちゃんたちに、負担がない範囲で再び土に触れさせてあげたい」

観光農園や体験型農園のビジネスモデルは日々進化しているが、近い将来、世継集落で「介護型農園」が誕生するかもしれない。居宅介護支援事業所ルピナスの目標は、農に「親」しむことにより、心が「和」み、心豊かな生活の場所と時の共有を目差すこと。腹を空かせて食料を求めた欠乏の時代から、ダイエットにお金を払う過剰の時代となった今でも、社名の親和に込められた理念は、世代も血縁も超えて引き継がれている。

（本文中敬称略）